

月刊

2013

1
月号

みんぱく

特集

へび



上方の「巳さん信仰」 田中 励儀
三線と蛇皮 笹原 亮二
へびとともに生きる人びと 岩谷 彩子
蛇を好む人びと 堺 淳
へびとの遭遇 信田 敏宏
権力の龍神と豊饒の蛇神 荒川 紘

ロシア語とロシア文学を三〇年以上勉強してきた。ロシア人についてたいのことはもう知っていてもよさそうなものだが、先日、ごく単純なことで大発見をして、我ながら驚いた。

事情はこうである。私はときおり外国の研究者や作家を呼んで講演会を行うのだが、そういうときはもちろん、案内のチラシを作って、正確な日時と場所を知らせなければならぬ。日本人の聴衆を想定しているから、講演そのものは外国語で行われるにしても、チラシは日本語で済ませてしまうことが多い。ところが、あるときロシア語でもそのチラシを作ろうと思ったって、開始と終了の時刻をどう表示したらいいのか、自信が持てないことに気づいた。いくら私の語学力がたいして高くないとはいっても、開始と終了を意味するロシア語の単語くらいは知っている。しかし、自分の作ったロシア語版チラシを見て、なんだか変な気がしたのだ。つまり、これはロシア語としては正しいのだが、ロシアではこんな書き方をした講演会の告知を見た記憶がないのである。

そこで、気になって、インターネットで調べてみた。講演会、シンポジウム、セミナーなど、様々なイベントはロシアでも花盛り。瞬時のうち



いったいいつ終わるんだろう？

沼野 充義

プロフィール

1954年生まれ、東京大学教授。ロシア東欧文学専攻、文芸批評家。著書に『徹夜の塊——亡命文学論』（2002年。サントリー学芸賞）、『ユートピア文学論——徹夜の塊』（2003年。読売文学賞）、『世界文学から／世界文学へ』（2012年。以上、作品社）、訳書にレム『ソラリス』（国書刊行会、2004年）、ナゴコフ『賜物』（河出書房新社、2010年）など。

に何十もの告知を探り当てたが、それらを見て自分の目を疑った。そのどれにも開始時刻は書いてあるのに、終了時刻を明記したものは一つもない。違和感はこのことから来ていたのだ。

しかし、考え込んでしまった。いくら日本ほど時間に几帳面ではないロシアであっても、イベントの終了時刻が分からなかったら、不便ではないのだろうか。あまりにも不思議なので、日本生活が長いあるロシア人に尋ねたら、なんでそんなつまらないことを聞くのかと言わんばかりの怪訝な顔で「ロシア人は終わりのことをあまり気にしない国民だからじゃないかな」と言う。しかし、私はそのあやふやな説明に納得できず、たまたま来日した別のロシア人の大文学教授をつかまえてしつこく同じ質問を繰り返したところ、「終わりの時刻を書くのは、ロシア人の感覚では失礼なことなんだよ」という予想外の自信に満ちた答が即座に返ってきた。つまり、「何時に終わりです」とわざわざ前もって断るのは、その時刻までに必ず帰ってもらいますよ、と言うようなものだから、客を招く態度ではないのである。

なるほど、ロシア人はそう考えるのか！ それならこちらでも張り合っただけで開始時刻が書かれていないチラシを一度作ってみたらどうだろうか？



1月号目次

- | | | | |
|----|-------------------------------------|----|--|
| 1 | エッセイ 千字文
いったいいつ終わるんだろう？
沼野 充義 | 14 | 地球ミュージアム紀行
エルデニ・ゾー博物館
——モンゴル最古のチベット仏教僧院
小林 繁樹 |
| 2 | 特集
へび | 16 | 連載リレー 知の収蔵庫
CRPS とこんには！ その2
わたしの居場所
菊澤 律子 |
| 3 | 上方の「巳さん信仰」 田中 励儀 | 18 | 多文化をあきなう
みんなくを持ち帰ろう
鈴木 紀 |
| 5 | 三線と蛇皮 笹原 亮二 | 20 | 異聞逸聞
世界最長の家系図
韓 敏 |
| 6 | へびとともに生きる人びと 岩谷 彩子
蛇を好む人びと 堺 淳 | 21 | みんなく私の逸品
樹皮画(虹蛇)
友永 雄吾 |
| 8 | へびとの遭遇 信田 敏宏
権力の龍神と豊饒の蛇神 荒川 紘 | 22 | フィールドで考える
わたしの芸能三番口説(くどうち)
呉屋 淳子 |
| 10 | 研究フォーラム
ランドスケープの人類学
河合 洋尚 | 24 | 次号予告・編集後記 |
| 12 | みんなく Information | | |

へび

京都・堀川今出川に鎮座する白峯神宮。その境内の潜龍社には、かつて寄宿していた修験者が御火炊祭の焰のなかに見出した、三柱の龍神が祀られている。社の裏手に、いくつかの石碑が安置されている。もとは民家の井戸に祀られ崇敬されてきた水神のご神体だが、建て替えなどで祀れなくなってしまうため、当社に引き取られたのだそう。おもしろいことに、石碑のなかには「龍蛇神」と刻まれているものがある。龍神、それとも蛇神？ 水神の正体はどちらなのだろうか？

今年の干支は巳、つまり蛇である。姿は去年の干支の辰とよく似ているのに、蛇はどちらかといえば世間の嫌われ者だ。しかし世界各地で神そのもの、あるいは神仏の使いとみなされてきたのも事実。芸能ともかわりが深く、最近ではペットとして愛され、ときには食用にも…？ 巳年のはじめに、日本と世界各地から、さまざまな蛇の物語をどうぞ。



白峯神宮の潜龍社 (撮影・菅瀬晶子)



妙音弁財天の絵馬 (撮影・菅瀬晶子)



潜龍社の裏手にあった、水神のご神体 (撮影・菅瀬晶子)



攝津名所図會 卷四

五一八



攝津名所図會 卷四

五一九

高津宮石段下の黒焼屋 (『攝津名所図會』寛政8年)

菅瀬晶子 (すがせあきこ) 民博民族社会研究部

上方の「巳さん信仰」

田中励儀 (たなかれいき) 同志社大学文学部教授

芸妓と蛇

蛇は、そのぬめぬめした感触や縄のような姿形から、忌み嫌われることが多い。ところが、かつて上方の芸妓は蛇を抱いて神社に詣でたという。明治三十年代の観光案内書には、南地の高津宮境内に祀られた高倉稲荷の信仰をめぐって、「世に気味悪きは此祠に参詣する芸妓ども、何処よりか生きたる蛇(小さき紙袋に入れたりといふ)を買ひ来たりて窃に之を放つなり」と紹介されている。芸妓が蛇を買ひ求めたのは、西門の石段下にあった二軒の黒焼屋。一晩、家に寝かして、それから宮裏の穴に放したという。漢方薬として黒焼きにされる寸前で生命長らえた蛇は、その僥倖を喜んだことだろう。

巳さんの祠

蛇は神様のお使いということから、芸妓の熱心な願掛けはむしろ称賛されたらしく、千日前通を挟んだ生国魂神社にも「巳さんの祠」があった。この祠は淀姫神社(現・鴨野神社)とよばれ、大坂城の異変を鎮めるために、淀姫の怨霊を鴨野の弁天島に祀ったものが起源とされる。そして、明治十年、砲兵工廠建設に伴って、生国魂神社の末社として境内に移されてきた経緯をもつ。昭和六年の時点でも、「淀の方は美人であったから信心すると美しくなるというので、芸妓などが女に似合わぬ蛇を持って参るので」という証言が残されているように、その信仰は長く生きてきた。



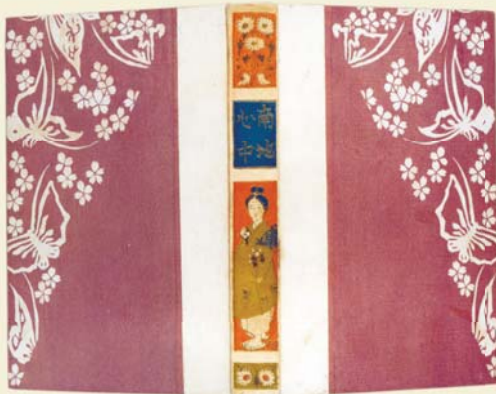
高津宮境内の高倉稲荷



太融寺境内の淀姫の墓



生国魂神社境内の淀姫神社



泉鏡花『南地心中』

淀姫への畏怖

もともと、淀姫神社の本体は流水のよどみに立たせ給う神、与止比売神（淀媛神）であるという説が有力で、〈与止比売〉が〈淀姫〉と音が通じるところから付会されたのが真相だと思われる。水都大阪に水の神である巳さんをお祀りする社が多いのは当然であり、大坂夏の陣で我が子秀頼とともに自害した淀姫に対する大阪人の思い入れも深い。あるいはその意志の強さから、蛇性を帯びた女性としての淀姫に対する畏怖が強かったのかもしれない。現在、北野の太融寺に淀姫の墓とされる六輪の石塔が建っている。そばに大樹がそびえていたころ、その根元には、巳さんへの供物なのか、蛇が好む鶏卵が供えられていることがあった。

泉鏡花えがく

明治四十四年来阪した作家・泉鏡花は、上方の巳さん信仰に驚いたらしく、花柳小説『南地心中』（明治四十五年一月）で、猿回しの青年と餅屋の娘が一緒になりたいという心願を込め、まるで言い合わせたかのように、互いに高津宮へ蛇を持参する話を描いている。また、京の宿を舞台としたホラー小説『紫障子』（大正八年三月四月）では、嵯峨の法印が封じ込んだという「巳様」が祀られている離座敷で、妖術を用いて美女の身体から絞り取った油を身につけ、「色のますます艶に、媚の愈々淫ならむことを欲する」芸舞妓らの秘密の信仰を描いている。

大阪と同じく京都でも芸妓の巳さん信仰は盛んであったらしく、明治時代には、巳の日の夜に花街の者が伏見稲荷のお山を巡る信仰行事を巳さんと称えていた。お稲荷さんとして祀られている祠も、じつの本体が巳さんであることが多い。蛇にまつわる信仰は、京阪において深く広く浸透していた。

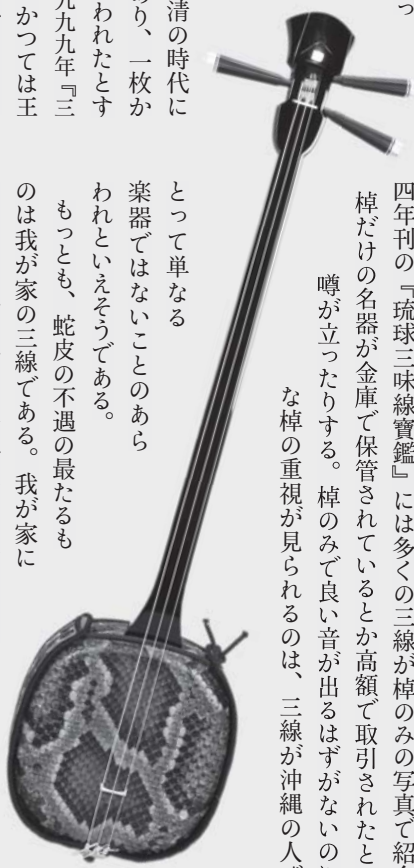
三線と蛇皮

笹原亮二 民博研究戦略センター

沖縄の弦楽器、三線

沖縄では、三線はかつての琉球王国の宮廷音楽の流れを汲む古典音楽を初め、琉舞や組踊りや芝居などの地方（伴奏）、民謡、果ては現代のポピュラー音楽にまで用いられ、沖縄の人びとにとってもっとも馴染み深い楽器のひとつである。三線は、クロキ（リュウキュウコクタン）で作られた棹を塗った棹（イヌマキ）やクスノキで作った胴に通し、三本の糸を張るが、その形状において、特に沖縄以外の人びとの目を引くのは、なんととっても胴の表裏に張られた蛇皮である。

もちろん、沖縄には三線の胴に張れるほどの皮が採れる大蛇はいない。したがって、昔から、南アジアや東南アジアのニシキヘビ類の皮が輸入されて用いられてきた。例えば、清の時代に中国から沖縄に輸出された物品のリストに「蛇皮七枚」とあり、一枚から三〜四分の胴に張る皮が採れ、輸入が三年に一度おこなわれたとすると、作れる三線は一年に九丁ほどになる（沖縄県立博物館、一九九九年『三線の広がり』と可能性）。そうした貴重な蛇皮を張った三線は、かつては王府の工房で作られ、王府や士族階層の人びとがたしなむものであった。因みに、戦前刊行の『日本名宝物語』には、旧琉球王家の尚家の宝物のひとつとして三線が紹介されている。明治以降は士族に限らず、財力を蓄えた人びとや地方の豪農も三線を手に入れられるようになったが、それでも一般庶民の手の届くものではなかった。



三線 日本、沖縄県 標本番号 H0224345

教養と富の証

こうした歴史を有する三線は、沖縄では単なる楽器ではなかった。沖縄の人びとは、三線が弾けなくても入手を渴望し、入手すると家宝として代々子孫に伝えたり、夫婦三線は縁起がいいとして二丁一對を専用の箱に入れて床の間に飾ったりしてきた。三線をもつことは、その家の主人が歌舞芸能を理解する高尚な趣味とともに、貴重で高価なものをもつことができる富を有するという、教養と経済力と両面での高い地位を示す証とされたのである。とはいえ、せっかく貴重な蛇皮を張った胴も、棹に比べて扱いはるかに劣り、「棹は命」といわれるほど大事にされてきたのに対し、胴は消耗品として軽視される傾向が顕著である。一九五四年刊の『琉球三味線寶鑑』には多くの三線が棹のみの写真で紹介され、棹だけの名器が金庫で保管されているとか高額で取引されたといった噂が立ったりする。棹のみで良い音が出るはずがないのに極端な棹の重視が見られるのは、三線が沖縄の人びとにとって単なる楽器ではないことのあるから

われといえそうである。もともと、蛇皮の不遇の最たるものは我が家の三線である。我が家には、以前わざわざ沖縄まで行って蛇皮を張り替えた三線があるが、この数年来床の間に飾ることもなく（そもそも我が家には床の間がない）、ケースごと押入の奥にしまったままである。せつかくの巳年、弾く時間がなかなか作れなくても、せめて部屋に飾って敬意をあらうぐらいはずべきかも知れない。

へびとともに生きる人びと

岩谷彩子 広島大学准教授



シェシャナーグ

畏怖され、信仰されるへび

日本人が抱いてきたインド人のイメージのひとつに、ターバンを巻いて笛を吹くへび使い、というのがある。へび使いはリグ・ヴェーダにも記述があるほどインドでは古代からおこなわれてきた生業だが、現在ではほとんど見られなくなった。このような生業はどのような人びとによって支えられてきたのだろうか。

インドでは、特定の動物は神の化身や乗り物として崇敬の対象となっている。へびもその例外ではない。シヴァ神が図像に描かれるとき、神の身体にまきついているのはコブラである。このため、へびは一般にシヴァ神の化身とみなされている。また、へびの王とされるシェシャナーグは、宇宙のすべての惑星を頸部に支え、ヴィシヌヌ神とともに描かれる。

インドで聖なる力をもつ存在は、シヴァ神のように並々ならぬ破壊力も持ち合わせる。へびもまさにそのような両義的な存在だ。毒を放つコブラ（クロコブラ、クロクビコブラ）は人びとに恐れられている。その一方で、コブラは先祖の生まれ変わりである、子ども（特に男児）を授けてくれるとされ、コブラを殺したり傷つけたりすると病気になる、ともいわれてきた。インド北西部ラージャスターン州では、ヒンドゥー暦シムラヴァン（七月八月）の五番目の日、ナーグ・パンチャミというへびに祈りをささげるお祭りがおこなわれる。ミルクが家の四方やへびの穴の近くにささげられ、この日は「へびが傷つく原因になりそうなこと（耕作や穴掘り）」は避けられる。

踊るへびから舞う人へ

このようなへびに対する畏怖と信仰を背景に、毒へびの駆除や、へびにかまれた際の治療や薬の販売、へびの見世物で生計を立ててきたのがカールベリヤの人びとだ。カールベリヤの「カール」は名詞で時間や死、形容詞で「黒色の」「恐ろしい」という意味をもつ。この他にもへび使いを指す「サペラ」、シヴァ神の化身であるへびを

操ることが許された行者であることを示す「ジヨギ・ナット」などとよばれる彼らは、ラージャスターン州を中心に、二〇〇三〇年前まで移動生活をしながら生計を立ててきた。ところが一九七二年に野生生物保護法が公布されて以降、毒を出す牙を除去する行為やへび使いの生業そのものが法律に触れるようになった。

一九八〇年代以降、まるでへびに代わるかのように、ひょうたんから作られる笛、ブーンギーに合わせて踊りを披露するようになったのがカールベリヤの女性たちであった。折しもラージャスターン州政府は、州の民俗舞踊を観光資源化しようとしていた。クロコブラを思わせる黒い衣装、キラキラ光るビーズの装身具、とぐるを巻くへびのようにしなやかに回転する踊りが人びとを魅了するのに時間はかからなかった。一九九〇年代には、カールベリヤの踊りはインドの「ジプシー」の踊りとして映画『ラッチョ・ドローム』で紹介され、海外からも注目を集めるようになり、二〇一〇年にはユネスコの世界無形文化遺産に指定されている。

へびから人へ、舞う対象は変化しても人びとはそこにへびの聖なる力の顕現を見出すにはいられないのだ。



へび使い(ジャイプルにて。2009年撮影)



映画『ラッチョ・ドローム』にも出演したスワ・デヴィ

蛇を好む人びと

堺淳

財団法人日本蛇族学術研究所 主任研究員

へびは、クモなどと並んで嫌いな動物のトップに位置しているが、その反面、近年ではエキゾチックアニマルとして意外に多くの人に飼われている。

同じ爬虫類のなかで、なぜかへびは足がないということだけで嫌われ、ぬるぬるして気持ちが悪くといわれ、噛みつく毒のある危険な生き物として怖がられている。

しかし、へびに対してこのような先入観をもたない人は、他の動物とは違うところに興味をもって見ているようである。世界中には約三〇〇〇種類ものへびがいて、爬虫類のなかではもつともカラフルな種類が多い。それが好まれる一因でもあり、熱帯魚のように水槽に入れて観賞の対象となっている。しかも、一般にはぬるぬると思われているのに反し、非常につるつるした、またはさらさらした感触で（種類によってはさらさらしているが）、毛のある動物とはまた違って、その感触がたまらないという人がいる。また、アオダイショウのくりっとした丸い眼を見て、「かわいい」という女性も多い。当

研究所の運営するスネークセンターに来て初めてへびに触れ、へびに対するイメージがまったく変わってしまった人も多い。

一方、コブラが首を広げたりガラガラへびが尾を振って威嚇している姿勢は、子どもだけでなく一部の大人には「カッコいい」と見えるようである。他の動物に比べると毒を持っている種類が非常に多く、そういう意味ではちょっと特殊で、毒へびしか興味が無いという人もいるほどである。そして、他の動物には見られないそのくねくねした動きでさえへびを好む理由となっている。

このようにへびに対して悪いイメージを持つていない人にとっては、へびはイヌやネコと同じような身近に置きたいかわい動物であるというだけでなく、種類によってはライオンなどのようにカッコいい動物でもあり、さらに観賞魚ならぬ観賞蛇ともなるのである。



アオダイショウのふ化。くりっとした眼をしていてかわいく見える

へびとの遭遇

信田敏宏 民俗 民族文化研究部



生け捕りにした蛇を両手でつかんでいるハジ・コニンさん (1998年撮影)

マレーシアの先住民オラン・アスリの多くは、今も狩猟採集活動を営んでいる。彼らは森にわけ入り、サルやリス、イノブタ、そしてへびなどの動物を獲ってくる。彼らにとってへびは悪魔でも神様でもなく、大事な食べ物なのである。

調査中、一度だけ大蛇に遭遇したことがある。バイクで森を走っていたところ、目の前に直径一〇センチ、全長三メートルくらいのもたら横様のへびが横たわっていた。乗り越えようとすると、「噛みつかれるぞ、

毒があるから注意しろ！」と村びとに怒られた。へびの種類も毒蛇の怖さも知らないわたしはさぞかし無謀に見えたことであろう。

へびとの遭遇からしばらく経ったころ、「ハジ・コニンがへびを獲った。写真を撮るチャンスだぞ」と村びとが言いに来てくれた。慌ててカメラを手に取りハジ・コニンの家に急いだ。大蛇を獲って嬉しそうに彼に、「そのへびをどうするんだい？」と尋ねると、彼は「もちろん、食べるよ」と答えた。

ハジ・コニンはイスラーム教徒である。ハジというのはメッカを巡礼した者に与えられる称号だが、彼はメッカ巡礼をしていないので、この名前は「あだ名」である。また、イスラームの戒律では爬虫類は食べることでできないはずであるが、彼は平気でへびを食べていた。イスラームに改宗したとはいえ、へびを見ると狩猟採集民の血が騒ぐのであろう。

権力の龍神と豊饒の蛇神

荒川 紘

静岡大学名誉教授



龍の根城だったという「江龍田の滝」



龍沢寺にある「龍の骨」。恐竜の脊椎骨と鑑定されている

が生まれ育ったところである。千本目の矢で龍を射止めることができた。そこが雨谷の近くの「千本」というところで、そのとき、龍の血が溜まり、もろあがって岡となったのが「赤岡」であり、血が坂となって流れたのが「赤坂」であった。

村を救ってくれた八幡太郎に感謝して建立されたのが隣の集落の八幡に鎮座する「八幡神社」であり、二キロほど北にある「龍沢寺」には退治された龍の骨が納められているとも教えられた。わたしは龍の骨を確かめる機会がなかったが、龍沢寺で龍の絵を目にしたのは記憶にあった。昨年からわたしは母の住む故郷の雨谷で暮らすようになった。そこで龍沢寺にでかけ、じつは恐竜の化石だという龍の骨をはじめて見た。そのとき、この近くには「蛇頭」といわれる赤坂川の淵があり、そこにも足を運んでみた。いまは樹木に覆われているが、以前は岩の切り立つ淵だった。この蛇頭という地名はわたしには見過ごせなかった。かつては水の神である蛇が信仰されていたが、東北地方で義家が英雄視されるようになると、蛇の信仰がもたれて義家の龍退治の伝説がうまれたのではないかと考えていたからである。

龍の誕生

世界的にも不死の生きものとみられていた蛇は豊饒のシンボル、水の神だった。この蛇神の信仰は日本にも伝えられて、縄文土器にも蛇の像が彫られるようになった。しかし、中国で農耕が小石川の周辺から大洪水もひきおこす大河の黄河流域に広がったとき、蝮のような小さな蛇では豊饒のシンボルとはならない。そこで、蛇に角をつけ、手足をもたせるようになる。体型も大きくなる。やがて鹿や鷹、牛などの動物が合わせられたより強力な生きものの龍が創造された。それは権力のシンボルとみなされ、皇帝の象徴となり、国家の守護神となった。また、人びとを苦しめる悪龍ともなった。

大蛇のコブラが棲息するインドでは手足をつけた龍は生まれなかった。そのまま強力な蛇であるコブラが水の神であるナーガとして信仰され

源義家の龍退治

わたしの故郷は福島県の最南部、塙町という田舎町である。その山や川で遊びまわっていた少年のころ、上級生から八幡太郎といわれた源義家による龍退治の伝説を聞かされた。

むかし、小盆地をなすこのあたりは湖であった。そこに流れる渡良瀬川の「江龍田の滝」を根城とする龍が狼藉をくりかえす。そこで、村人は北の蝦夷攻略のために通りかかった源義家に龍の退治を懇願した。それを受けた義家は湖の水を涸らし、東にある小高い山の「弓張堂山」から弓で龍を狙う。わたしはまだ見ていないが、山頂の大石には義家の足跡があるという。その矢が雨のように降り注いだのが「雨谷」、わたし

た。仏教とともに蛇のナーガは龍と同一視され、ナーガの王であるナーガ・ラージャは龍王と訳された。どちらも水の神、龍の祖先は蛇だったから、同一視されるのは自然なことであった。

日本人も縄文時代から豊饒のシンボルである蛇の信仰に生きていたが、中国から伝来した龍は権力のシンボルとして、武器を飾る造形となり、仏教を守護する神として寺院の天井に描かれた。悪龍も伝えられ、源義家による龍退治の伝説も語られるようになった。

日本でもそれまでの蛇の信仰は龍と融合し、農民のあいだでも、龍神や龍王に慈雨を祈るようにもなるのだが、縄文時代以来の豊饒の蛇の信仰も生き続けた。ふだんは嫌われものの蛇が豊かな稔りをもたらしてくれる。だから、早魃のときには慈雨を蛇神に祈願した。蛇頭という地名も雨乞いと関係があるのではないのか。この蛇頭の淵で雨乞いの祭りがおこなわれていたのではないか。農民は権力の龍とちがう、豊饒の蛇の信仰をまもりつづけてきたにちがいない、とわたしは考えていたのである。

いま、福島の人びとは東電福島第一原発という悪龍の吐く毒気に苦しんでいる。わたしはそれではいけないとは思いますが、心は萎えがちである。この悪龍は想像していたよりもはるかに強力なのだ。追放する見込みはたっていない。だから、八幡太郎のような英雄が現れて、悪龍を退治してほしいと思っている。そして、蛇の助けもかりて大地の豊饒を喜べる日がふたたび到来するのを心から願っている。



ナーガ神像 インド 標本番号 H0092724



安原原の蛇造り (写真提供・川口市)

年末年始展示イベント「へび」

会期 1月29日(火)まで
会場 本館展示場内ナビひろば
※期間内はナビひろばも観覧無料です。
■関連イベント
◆ギャラリートーク
日時 1月14日(月・祝)
①11時～11時30分
②14時30分～15時

◆ワークショップ
「カルタを作って世界のへび」をみてみよう」
参加者はへび展会場で解説を聞いた後、印象に残った展示物を選び、スケッチやカラーシジュをして、カルタを作ります。
日時 1月14日(月・祝)
①10時30分～12時30分(受付開始10時)
②14時～16時(受付開始13時30分)
集合場所 第3セミナー室
定員 16名
※要申込(先着順)・参加無料(当日無料観覧日)申し込み・お問い合わせ先
情報企画課「へび」展ワークショップ担当
workshop@dc.minpaku.ac.jp

◆ワークショップ
「カルタを作って世界のへび」をみてみよう」
参加者はへび展会場で解説を聞いた後、印象に残った展示物を選び、スケッチやカラーシジュをして、カルタを作ります。
日時 1月14日(月・祝)
①10時30分～12時30分(受付開始10時)
②14時～16時(受付開始13時30分)
集合場所 第3セミナー室
定員 16名
※要申込(先着順)・参加無料(当日無料観覧日)申し込み・お問い合わせ先
情報企画課「へび」展ワークショップ担当
workshop@dc.minpaku.ac.jp

みんなくミニナール

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は観覧料が必要です)
第416回 1月19日(土)
「春のみんなくフォーラム2013」関連
ヨーロッパのキリスト教とファシズム
——ルーマニア・レジオナル運動を中心に——
講師 新免光比呂(国立民族学博物館 准教授)
深澤英隆(一橋大学 教授)
江川純一(東京大学大学院人文社会系研究科 研究員)



よく耳にするファシズムとはいったいどういったものなのでしょう。そしてヨーロッパではキリスト教と関係があるのでしょうか。そんなことをルーマニアを中心にしてドイツ、イタリアの事情と比較して考えてみます。

第417回 2月16日(土)
「春のみんなくフォーラム2013」関連
変わるヨーロッパの言語地図
——多言語「社会から」多言語「社会へ」——
講師 庄司博史(国立民族学博物館 教授)



20世紀後半以降ヨーロッパの多くの国では移民の増加や地域的少数言語運動の活発化により、さまざまなことが社会のなかで顕在化しはじめています。ヨーロッパはどの国「一言語主義はここにむかうのか」でしょうか。

「やっぱりヨーロッパ——春のみんなくフォーラム2013」
会期 1月5日(土)～3月23日(土)

◆パンセミナー(全4回)
小麦とライ麦は世界の食文化の中で大切な穀物です。ヨーロッパでは多様な形態のパンとして広く利用されています。このパンとヨーロッパの文化との関係をフィンランド、ルーマニア、ドイツ、イタリアの専門家が語ります。
▼第1回 1月26日(土)
「北欧のパン——ライ麦パンってどんな味?」
講師 庄司博史(国立民族学博物館 教授)、井上シルッカ(フィンランド料理アドバイザー)

▼第2回 2月9日(土)
「東欧のパン——礼拝ではワインとごも」
講師 新免光比呂(国立民族学博物館 准教授)
※2月9日(土)では、ご希望の方(20歳以上)には、ワインをご用意いたします。ただし、参加費の他に別途500円をいただきます。当日は、お車でのご来館をお控えください。
▼第3回 2月23日(土)
「ドイツのパン——地方の特徴、そして伝説」
講師 森明子(国立民族学博物館 教授)
▼第4回 3月9日(土)
「イタリアの日常生活とパン」
講師 宇田川妙子(国立民族学博物館 准教授)

各回とも
時間 14時30分～16時(受付開始14時15分)
会場 国立民族学博物館 食堂(本館1階)
参加費 一人あたり500円
対象 中学生以上
(お子様の同伴はご遠慮ください)
定員 一回につき40名
※有料、要申込
申込締切
①第1回、第2回 1月11日(金)
②第3回、第4回 2月8日(金)

◆みんなく映画会
「パリ20区、僕たちのクラス」
日時 1月12日(土) 13時30分～16時30分
(開場13時)

会場 講堂(先着450名)
※参加無料、申込不要
◆展示場クイズ「みんなQ」ヨーロッパ編
期間 1月8日(火)～2月3日(日)
会場 ヨーロッパ展示場
◆みんなくセミナー
左のページをご覧ください。
◆みんなくウィークエンド・サロン
詳細は本誌24ページをご覧ください。
※このほかにもイベントを予定しています。お楽しみに!

以上フォーラムについての申し込み、お問い合わせ先
広報企画室 企画連絡係
電話 06-6878-8210
国際シンポジウム
「グローバル化における紛争と宗教的社会運動——オセアニアにおける共生の技法」
日時 1月26日(土) 10時～17時10分
会場 第4セミナー室
定員 70名
※参加無料、要申込、同時通訳あり
申し込み・お問い合わせ先
紛争と宗教シンポジウム事務局
0126@dc.minpaku.ac.jp

国際研究フォーラム
「バルト海周辺地域の日本コレクションⅢ」
今回のフォーラムは、昨年6月に実施した「バルト海周辺地域の日本コレクションⅢ」調査に関連し、スウェーデン、フィンランド、デンマークから研究者を招へいて、これまで日本に未紹介だった資料の一端を明らかにします。
日時 ①2月2日(土) 10時30分～16時45分(開場10時)
②2月3日(日) 10時30分～16時30分(開場10時)

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員登録必須)
第416回 2月2日(土) 14時～15時
みんなくコレクションを語る
明治と昭和初期の樺太資料の収集者たち
講師 齋藤玲子(国立民族学博物館 助教)

みんなくには鳥居龍蔵や石田収蔵らによって収集された樺太の先住民族(ニブフ、ウイルト、アイヌ)の貴重な資料があります。現在、彼らの収集の足跡をたどりながら、資料の情報をあらためて整理しています。その過程で明らかになったことなどを、実際に資料もお見せしながらお話しします。

東京講演会

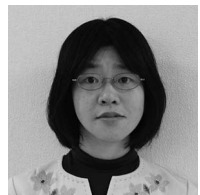
会場 JICA市ヶ谷ビルセミナールーム600
定員 80名(要申込)
第105回 3月30日(土) 14時～16時
特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」関連
何処にもある何処にもない世界 マダガスカル
講師 深澤秀夫(東京外国語大学 教授)
飯田卓(国立民族学博物館 准教授)

「やっぱりヨーロッパ——春のみんなくフォーラム2013」関連
親子ワークショップ「春よこい」
(要申込、参加者プレゼントあり)

みんなで踊ろう!——トランシルヴァニアの踊りと歌
※踊りと歌の鑑賞だけでも楽しめます。
1月27日(日) 14時～15時半、参加無料
会場・EXPO70パビリオン、定員200名
※内容や詳細は上記友の会までお尋ねください。

第81回民族学研修の旅
ミヤンマー・タウバン月の祭りを訪ねて
——仏教と精霊ナツの儀礼——
3月19日(火)～28日(木) 10日間
※内容や詳細は上記友の会までお尋ねください。

会場 第4セミナー室
定員 60名
※参加無料、申込不要、同時通訳あり
お問い合わせ先
研究協力係 在外資料調査研究担当
nihonzaiiga@dc.minpaku.ac.jp



【研究部の新メンバー】
藤本透子 助教(民族文化研究部)が2012年12月1日付けで着任いたしました。日本学術振興会特別研究員/京都大学 国立民族学博物館・機関研究員を経て現職 専門は、文化人類学、中央アジア地域研究 著書に『よみがえる死者儀礼——現代力ザフのイスラーム復興』(風響社)、「カザフの子育て——草原と都市のイスラーム文化復興を生かす」(風響社)、「フックレット」(アジアを学ぼう)⑨)などがある。

●展示場リニューアルのお知らせ
本館展示場「日本の文化」展示のうち「祭り」と芸能」と「すまいとくらし」の二部がこの3月に新しく生まれ変わります。それに伴い、「日本の文化」展示全体が工事のため閉鎖されます。
閉鎖期間 3月21日(木)まで

●休館日・無料観覧日のお知らせ
年始は1月4日(金)まで休館します。
1月14日(月・祝)成人の日は本館展示を無料で観覧いただけます。ただし、自然文化園(有料区域)を通行される場合、入園料が必要です。
※イベントや刊行物について、くわしくはホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時(土日祝を除く)です。

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

フェアトレードのチョコレート

ショップで秋冬限定販売をしているビュブルツリーのチョコレートは、ボリビアの協同組合「エル・セイボ」の力カオ豆を使用した、フェアトレード商品です。エル・セイボは力カオ豆で得た収益を、組合員世帯や地域発展のために還元しており、現在は二〇〇人をこえるメンバーが、自然環境を守るサステナブルな農業をめざし、有機栽培にも力を入れ、発展を続けています。ボリビアの力カオ豆は、スイスで練り上げられ、おいしいチョコレートになって、日本に届けられます。今年も、新しくビターレモンピール味(50グラム)も加わり11種類。
素敵なキフトボックスなども用意しております。大切な方への贈り物にぜひ、ご利用ください。



フェアトレードチョコレート
50g 8種類 各290円
100g 3種類 各580円
ブロックプリントボックス 300円
手透き紙封筒 180円

価格はすべて税込

エルデニ・ゾー博物館

—モンゴル最古のチベット仏教僧院

小林 繁樹

民博文化資源研究センター



宗教施設が博物館になったとしても、

「聖性」が失われ、「世俗化」してしまっわけではない。

展示や収集、保存、修復という博物館の活動を通して、

宗教活動が活性化する可能性を秘めている。

寺院から博物館に

「エルデニ・ゾー」を訪れたのは、昨年七月半ばだった。五年ぶりの再訪である。

エルデニ・ゾーはモンゴルのほぼ中央、ウブスハンガイ県のハラホリンにある。首都ウランバートルからほぼ西方、三六〇キロメートルほど離れたハラホリンへは、四輪駆動車を任立てて行った。五年前のガイドブックと見比べてみると、飛行機はチャーター便しかなかったものが週二便の定期便となり、長距離バスも午前中に出発のようなあいまいなものから定時出発となり、しかも所要時間が約二時間から六時間強と大幅に短縮されている。実際は、昼食や休憩などを入れながら九時間を要したけれど、道路は整備され、舗装されていた。一九九〇年に始まった民主化、市場経済化の進展はめざましいばかりである。

ハラホリンは地区の中心地とはいえず、小さな町である。しかしここは、かつてモンゴル帝国の首都がおかれ、カラコルムとよばれていた。オルホン川流域のこの地は六万年前から人が住み始め、六世紀に遡ることができる突厥という名で知られるテュルク系民族の遺跡や史跡も多い。一二三五年には、モンゴル帝国第二代のオゴデイ・カアンが首都を建設する。カラコルムの都市遺跡は調査中であるが、考古学的・歴史的に重要なこの一帯は、二〇〇四年に「オルホン渓谷の文化的景観」として世界遺産に登録されている。そして、カラコルム都市遺跡の上に建つ、もともと新しく規模が大きい建築物がエルデニ・ゾーである。

一五八六年創建で「三玉の像」といわれるエルデニ・ゾーは、一〇八基の白い仏塔が配置されている。四〇〇メートル四方の重厚な外壁で囲われた寺院群である。壁の四方には楼門がある。一九七二年には、敷地内に六二の寺院と五〇〇棟の建物があり、二万人ほどの僧がいた。多くの建物が破壊された一九三〇年代の粛清時を経て、現在は一八の寺院や建物が残っているだけであり、一九四四年に国家が保護し、一九六五年に博物館となった。寺院や仏具などはすべて博物館資料となり、建物の修復や散逸資料の回収もおこなわれている。

近づくこと、まずその規模の大きさに驚いてしまう。全貌は近くの丘の上からでないと見ることができない。入口となる西の楼門前は、相撲などの競技がおこなわれる夏の祭典ナーダム明けとあつてか、来訪者の車であふれかえっている。入口近くにある博物館のほか、現在、八力所が展示対象で、中心は三寺の伽藍、仏舍利塔であるソボルガン塔、ラブラン寺伽藍である。内部はチベット仏教寺院そのものであり、小振りの仏像や壁画、掛軸などはガラスの仕切りで保護されている。けれどその赤色の枠がしっかりとできていて、鑑賞の際、多少目についてしまう。

仏教への回帰

エルデニ・ゾーでの最近の動きとしては、一九九〇年から仏教活動がこの博物館のなかで再開されたことがあげられる。伝統的文化や民族文化を見直すうちに、宗教への回帰も始まったのである。ソボルガン塔の前には五体投地の台が設置されているし、ラブラン寺では多くの僧が読経している、厳粛な気持ちになる。博物館と寺院との共存はおおくの問題を含むだろうが、上手に乗り越えていってほしいと思う。

さらに、一昨年の二〇一二年六月、日本の政府開発援助によりあらたにカラコルム博物館がすぐ隣に開館した。周辺の埋蔵文化財の展示、保存、研修、修復を目的とした博物館である。観光地化も進む今後は、両者の相乗的な効果があがることだろう。

今回の、わたしのエルデニ・ゾー訪問は、民博の同僚、園田直子教授を日本側コーディネーターとする日本学術振興会研究拠点形成事業（B. アジア・アフリカ学術基盤形成型）「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」の共同研究会の一員として参加したものであった。民博は一九九四年から国際協力機構と協力して博物館学関連の研修を実施しており（二〇〇四年からは委託事業）、この研修を修了したモンゴルの博物館や文化施設の専門家は一人にも達している。ハラホリンの研究会でも、活躍していらっしゃる皆さんとの研究交流を深め、問題や検討課題を共有して、解決に向けての行動を誓いあったことは言つまでもない。



2011年に開館したばかりのカラコルム博物館内部



カラコルム都市遺跡にたえずむ、石碑を載せる台座である亀趺（きふ）



宗教活動が再開されているラブラン寺



三寺のなかの西寺の釈迦牟尼像



寺院内部の様子。展示物のおおくがガラスで保護されている



丘の上から見たエルデニ・ゾー全景。奥にカラコルム都市遺跡が広がる

わたしの居場所

CRPSとこんにちは！ その2

CRPS（シー・アール・ピー・エス、複合性局所疼痛症候群）は、神経系で痛みが生成される病気だが、強い症状が続くと手が使えなくなり、二次的に変形してしまうこともある。揺れる乗り物のなかでは手が使えないと身体を支えられない。でも、優先座席に座ると周りが気になって落ち着かない。両手が自由にならない日常生活が何年か続き、技術や社会制度、人の意識のありかたなどについて、改めて考える良い機会になりました。

「病気になるっても働け」

発病後半年を過ぎてCRPSという病名がついたころ、ある同僚から「せっかく病気になるのなら（ー）、こういう研究もあるよ」と渡されたのが、文化人類学者マーフィーの『ボディー・サイレント』。脊椎腫瘍に神経系が徐々に破壊され、時間を追って身体が動かなくなる病気にかかった著者が、フィールドを南米アマゾンから自分の周囲のアメリカ社会に切り代えて観察した古典である。この、「病気になるっても働け」というメッセージの本当のありがたさが理解できるようになったのは、最近になってからのことかもしれない。

CRPSでは、休職はすすめられない。病院に行けば、カーテン越しに「休むと余計につらくなるだけです」と患者さんを叱咤する声が聞こえてくる。すべきことがあれば、気が紛れて救いになる。高度の集中力を要する論文執筆は痛みのため難しくかったが、幸か不幸か、研究者には研究以外にもさまざまな業務がある。会議や打ち合わせならOK。偶然にも発病後の数年間は、展示場の改修や国際会議の主催などの担当があり、これほどよいタ

イミングはないと思われた。もうひとつ運が良かったのは、技術が発達した現代であったことだろう。

技術の恩恵

声でパソコンを操作できる音声認識システムは、ソフトを入れるだけで使えるようになる。これでメールの対応も、CRPSとの経験を綴ることもできるようになった。ちなみに同僚の視覚障害者Hさんが使うのは、パソコンの読み上げ機能。モニターは必要ないから机の上にはパソコン本体とキーボードがなく、考えてみれば当たり前だが、見ているとやっぱり不思議な感じがする。

パソコンといえば、頬の筋肉や眼球運動などのわずかな動きで操作できる意思伝達装置をテレビでとどきどき目にする。筋委縮性の病気や脳性麻痺などで身体の動きを制限されたとき、「残された」機能を使って周囲とやりとりする手段となる。けれどもそれが、「最初から」身体を動かすことができず、言語を話したことがない子どもたちにも使い得るものであることには、思いが至っていないかった。

白田輝「輝（ひかる）いのちの言葉」は、一歳になる直前に脊

髄を損傷し、筋肉ひとつ動かせないまま一六歳まで生きた著者による。もちろん、言葉を発することもできないから、周囲とのコミュニケーションもとれなかった。ところが一三歳のときにパソコンを利用してカナを拾うことのできる装置を与えられると、文を綴りはじめると周囲を驚かせたという。重い障害のある人は「はい」「いいえ」も表現できず赤ちゃん程度の発達段階とみなされがちだが、

段階とみなされがちだが、多くは言葉（思考）を持っている……報道ではそんな側面に焦点があてられていた。わたしはといえば、自己のなかで反芻し続けるだけでことが充分に使えるようになる、ということに驚いた。能動的な言語技術（書く、話す）の習得には、他者とのやりとりが必要だと思いついてきた。それにしても、まわりの話がすべて理解できているのに、他の人は自分がものを考えていることすら知らない、というのはいったい、どんな心境だろうか。「ノンフィクション」のドラマのような体験をしてきた。ドラマよりすさまじい体験をしてきた」と白田少年は綴っている。

カミングアウト（うちあけること）さて、音声認識でパソコンは扱えるものの、論文は書けないし、書類は穴だらけ。働き続けることが本人にとってはよいとしても、そういう人間を雇用していいのかわかるか、単なる自分勝手といわれるのではないか。そう思うと、CRPSのことを公にすることはできなかった。病気を理由にした解雇や復職拒否等の問題は多いと聞く。その一方で、発達障害等に関する情報が求められているのは、排除するだけでは成り立たないことが認識されはじめてきているからだろう。臨床心理士中島美鈴はブログ「上手に悩むとラクになる」のなかで、アスペルガー症候群の社員を受け入れる過程を描きつつ、つまるところは個性や個別の状況への対応と同じであり、結果として皆にとって働きやすい職場づくりにつながれるとしている。「違う」特性をもつ人の存在は、社会を住みやすくするきっかけを与えてくれる。長野県のある精密機械加工所では、ふれジョブに来た中学生が効率よく作業できるように作業台を制作。その台はその後、通常の作業に導入されたと聞いた。身近なところでは、車いす用にと設置されるスロープ。年配の方にも、スーツケースのお姉さんにも、おもちゃのトラックにのった男の子にも、みんなにやさしい。それでも、「違う」人の特性を生かすのは、今の社会ではまだまだ難しい。

それにして、とわたしは考える。伝統的な社会では、どんな違いを持つ人にも役割があって、歩けなくなったお年寄りも病気の人もコミュニケーションの一員として普通に暮らしていた。フィリピン・ルソン島のポントックでは、割礼は収穫期の儀礼だった。痛みで動けない男の子たちは米のそばに座って一日中鳥を追う。新しい役目と痛みから気を紛らわせるしくみがちゃんとあった。一方、現代社会では、「違い」ができたとなんか生活が変わってしまいうことが多い。

……論文執筆を再開しつつある今、それでも役割があることを示してくれた「病気になるっても働け」に感謝しつつ、技術の発達とともにわたしたちの意識のあり方を発展させることで、誰がどんな状況になっても居場所がある社会にできるよう願っている。



2012年に主催した手話言語学の国際シンポジウムでは、英語・日本語に加え、日本手話、アメリカ手話、香港手話の話者が集まり、さまざまな通訳をおとして議論が進められた（2012年7月）

菊澤 律子 民博民族文化研究部

新しくなった民博の言語展示場。国際歴史言語学会開催時には海外からの参加者も多数見学（2010年3月オープン）



多くは言葉（思考）を持っている……報道ではそんな側面に焦点があてられていた。わたしはといえば、自己のなかで反芻し続けるだけでことが充分に使えるようになる、ということに驚いた。能動的な言語技術（書く、話す）の習得には、他者とのやりとりが必要だと思いついてきた。それにしても、まわりの話がすべて理解できているのに、他の人は自分がものを考えていることすら知らない、というのはいったい、どんな心境だろうか。「ノンフィク



クションのドラマのような体験をしてきた。ドラマよりすさまじい体験をしてきた」と白田少年は綴っている。

みんなばくを持ち帰る

鈴木 紀

民博 先端人類科学研究部

ミュージアムのあり方が変わるにつれて、

展示に関連した品が手に入るミュージアム・ショップに、期待される役割も変わっていく。民族学博物館のショップであればなおさら、ただ世界のものが手に入るだけではなく、博物館と生産者と消費者、この三者をつなぐ役割が求められるのではないか。

ミュージアム・ショップの草分け

一年前、本コーナー「多文化をあきなう」の連載を開始したとき、途上国の人びとが作った民芸品を販売するフェアトレード・ショップを「街の民族学博物館」とたとえてみた。モノを通じて、それを作った人びとの暮らしを想像できる点が博物館と同じだからだ。そして、気に入ったモノを実際に購入できるところが、本物の博物館にない利点だとも述べた。だが、多くの博物館にはミュージアム・ショップがあるのも事実である。それを楽しみに博物館を訪れる人も少なくないだろう。そこで今月は、みんなばくミュージアム・ショップをとりあげ、どのように多文化があきなわれているか注目してみたい。

みんなばくミュージアム・ショップは、日本におけるミュージアム・ショップの草分けといわれる。国立民族学博物館開館当時から、財団法人千里文化財団（一九八三年まで民族学振興会千里事務局）

ド商品だ。フェアトレードとは、途上国の商品生産者支援を目的におこなう貿易のことである。売れ筋はフェアトレード・チョコレートだ。このチョコレートは、南米ボリビアのエル・セイボ組合が生産したカカオ豆を原料に使用している。同組合は、誠実にフェアトレードに取り組み、着実に成果をあげてきた生産者団体のひとつである。他にも、ミクロネシア連邦ボンベイ島の日系人の農場で収穫されたコショウを佃煮にしたものや、ラオス南部の町サワンナケートに伝承される藍染・草木染の手織り木綿を使用した製品など、生産地の特産物や技術をいかした商品を、現地情報を紹介しながら販売している。

地元支援の商品は「みんなばくクッキー」である。このクッキーは吹田市の生活介護事業所ぶくぶくワールドの製品で、ミルクとチョコレートふたつの味が楽しめる。同事業所は一九九〇年から障がい者の雇用創出のために、食品添加物を使用しない安心、安全なクッキーを製造している。パッケージをデザインしたのは、武庫川女子大学の学生たちだ。彼女たちがみんなばくの展示場を見学して着想をえた仮面のイラストが、箱を飾っている。

東日本大震災の被災地で作られた商品もある。一つは岩手県山田町の醤油である。さしみ用で甘めの味に特色がある。津波で店舗を失った山田町の企業が製造する製品を、復興支援のために販売している。もうひとつは、宮城県南三陸町の「きりこ」グッズである。きりことは、神社の神職が正月の神棚飾りのために縁起物を切り抜いた半紙のことである。地元の女性による「彩（いろどり）プロジェクト」が中心となり、震災後、きりこを復興のシンボル

が経営し、現在ではネット通販ワールド・ワイド・バザールも開設されている。「みんなばくを持ち帰ろう」をコンセプトに、来館者が展示場でえた感動を自宅までもって帰れるような商品をそろえている。販売されている商品の種類は、世界の国々でつくられた民芸品を中心に一〇〇〇種以上にのぼり、カレンダーやポストカード、文房具などのオリジナル商品の人気も高い。書店も併設し、民族学・文化人類学関係の書籍やCDが売られている。

生産者を支える

近年、みんなばくミュージアム・ショップでは、生産者の暮らしを支える商品が販売されるようになった。ショップのなかほどに、そうした商品が並ぶコーナーが設置されている。そこでのキーワードはフェアトレード・地元支援・被災地支援の三つである。

このコーナーで目につくのはやはりフェアトレードとして商品開発をおこなった。ショップでは、きりこのデザインをあしらったTシャツやタンブラーなどを扱っている。

顔が見える

こうした商品がみんなばくミュージアム・ショップの一角を占めるようになってきたことは、みんなばくの社会的な使命が変化していることと軌を一にしている。かつて博物館に期待されていたのは、専門の研究者による学術的成果を一般に伝達する機能だった。そのためそこで情報の流れは、博物館から来館者へという一方通行が普通だった。ところが現在みんなばくではフォーラム型展示を目標に掲げ、展示品の制作者、研究者、来館者の三者のあいだの対話や情報共有を試みはじめている。これは来館者にとって、みんなばくが単に異文化に触れる場所ではなく、異文化の人びとと交流するきっかけをえる場所へと変化していくことを意味している。

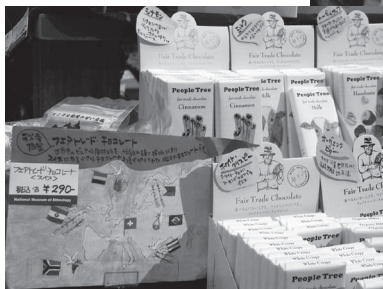
したがって「みんなばくを持ち帰る」ためには、みんなばくミュージアム・ショップで扱う商品も、なるべく生産者の顔が見えるものであることが望ましい。どんな人がどのような思いでつくったモノなのかわかることが重要だ。それを購入した来館者が、生産者の暮らしが安定したり、伝統的な技術が維持されたりすることを想像できるならば、それはその商品の新しい付加価値になっていくだろう。その際みんなばくの研究者が、生産者と来館者相互の交流を促進する役割を担うことも必要だ。みんなばくフォーラム型展示に対応した、みんなばくミュージアム・ショップの今後の展開に期待したい。



お祭りでは踊るボリビアのエル・セイボ組合の女性たち



きりこをデザインしたTシャツ



フェアトレード・チョコレート (本号p13にて紹介)



みんなばくクッキー

みんなばくオリジナルスタンプ



みんなばく1階にあるミュージアム・ショップ



世界最長の家系図

はん 敏
韓 敏

民博 民族文化研究部

思想的に大きな影響を後代の人びとにおよぼした孔子ではあるが、多くの日本人にとって、はるか昔の人のイメージが強い。しかし中国では孔子一族は決して過去の存在ではない。族譜を通じてその一族は今日まで脈々と続き、また裾野をひろげてきている。

族譜でつながる人びと

中国では、古くから父系の家系図を記録する族譜をつくる風習がある。族譜は、一族の由来から、その後の系譜関係、墓地の分布、男性メンバーの生死の日時、学歴、官職、妻子などさまざまな一族の歴史を記してきた。

族譜はかつて帝王諸侯の家系と事績を記録することに始まった。婚姻や官位の等級はその家柄によって左右されたので、族譜の編集は貴族のあいだで盛んにおこなわれた。

唐代と宋代、門閥貴族が没落すると新支配層となった地主や社会的地位のある官僚・知識人のあいだで族譜の編集が盛んになり、明代には一般庶民にまで普及するようになった。

族譜編集が貴族から地主や庶民へとシフトするにつれて、編集の目的も官僚や婚姻相手選定の際、家柄を参照する手段から、祖先崇拜や一族の親睦をはかるもの

へと変わっていった。

よみがえる族譜の伝統

文化大革命のころ、族譜は封建制度の名残とみなされ、没収されたり、焼かれたりしたが、一九八四年からは国の貴重な文化遺産として認められ、民間でも族譜の編纂が再開されている。

たとえば、孔子一族は二〇〇九年に七〇年ぶりに第五版の『孔子世家譜』を出版した。それまでの二千年のあいだに、孔子一族の族譜は、明代の天啓、清代の康熙、乾隆の時代と一九八三年の四回にわたって改修され、二〇〇五年には「世界最長の家系図」としてギネスブックに登録された。新しい『孔子世家譜』は、八〇冊、四三万ページ、約二千万字から構成され、二〇〇万人あまりの孔氏メンバーが収録されている。そのうち、元の順帝（一三三三年～一三七〇年）時代の五四代目から現在の八五代目までのあいだには二万八千あまりの韓国在住の孔子の子孫が含まれている。



民博の図書室に収蔵されている「孔子世家譜」

現在、日本における中国系の人びとは六〇万人にもおよぶという。孔子の族譜を受けつぐ人びともきつといるのではないだろうか。

みまぼく 私の逸品 樹皮画 (虹蛇)

標本番号 H014041
地域 オーストラリア
受入年 1986年

民博 外来研究員

ともなが ゆうご
友永 雄吾

虹蛇（にじへび）にまつわる物語はオーストラリア全土にみられる。この写真の虹蛇は中央アーネムランドの先住民集団に語りつがれる彼らのカントリー（故地）と深く結びついたドリーミング、すなわち神話の一部である。「ウンガリヨド」とよばれる虹蛇は、この地域の人びとの祖先を創造したと伝えられている。ウンガリヨドは変態能力をもち、そのため樹皮画の作者は虹蛇の姿に重ねて祖先を描くことも、特定の土地や動植物の特徴と結びつけることもできる。現にこの写真の虹蛇も魚の尾とカンガルーのような耳をもっている。

こうした樹皮画はおもにユーカリの樹皮を使用し、オーカーという酸化鉄を原料とする赤や黄、粘土でつくる白、木炭からなる黒を基調として描かれる。それがメッセージ性をもつのは、この地域の人びとが神話を共有しており、絵のデザインは先祖から受け継いでいるからである。そのデザインは幾何学模様を施したクロス・ハッチング技法で、現在も彼らにとって秘密性の高い儀礼をおこなう際にもボディ・ペイントとして用いられている。

わたしが調査する南東部の先住民集団ヨルタ・ヨルタでは虹蛇は、大河マレー河の創造神話に登場する「ドゥナトパン」とよばれている。虹蛇は一九九〇年代中頃からTシャツやマグカップにプリントされはじめた。それは、一九世紀初期の強い植

民（さぶ）に晒され言語や親族組織など固有の文化を失った地方の町や都市に住むヨルタ・ヨルタが、一九九三年に制定された先住権原法にもとづき土地の利用権を求める運動を展開するために虹蛇を活用しはじめたこととかわわっている。一九六〇年代、北部や中



部の先住民集団が土地権の回復を国家に求めたときに、その声明文を樹皮画にしたためたことが、その契機となったのだ。こうして虹蛇は、神話の世界から飛びだし、先住民と土地との深いかわりを示すために現在（いま）に蘇（よみがえ）るのである。

わたしの芸能三番口説(くどうち)

呉屋 淳子
民博 機関研究員

一番、芸能は「聞く」べし
わたしが生まれ育った沖縄本島中部は、エイサーや獅子舞が盛んな地域である。カレンダーなど確認しなくとも、夏の汗ばむ夜に鳴り響く三線や太鼓、笛の音が、旧暦七月の旧盆の訪れを知らせてくれる。

旧盆前に掲載された地元新聞の投稿記事を読んでいると「今年の旧盆は、どこのエイサーを見にいこうか、胸が弾む」という一文が目に入ってきた。わたしはその瞬間、調査地である石垣島の白保で出会ったある青年が「地元以外の芸能を見に行く余裕なんてない。自分たちのところだけでも大変なのに」と話していたことを憶い出した。

わたしのワールドワーク中の滞在先は、石垣島のちょうど東海岸に位置する白保という珊瑚礁が広がる海に面した村だった。白保は、石垣島のなかでも芸達者の多い村として有名な地域であり、「芸能の宝庫」とよばれている。芸能教育について調査するために石垣島を訪れたわたしにとって、白保の人たちの雑談はすべてが興味深く、聞き入る話ばかり

だった。とりわけ、興味深かったのは、若い唄者が唄う八重山民謡を聴きながら、異なる年齢層に属する者がひとつの場所で交流していることだった。若者たちは年長者の芸能に關するうんちくに耳を傾ける。そして、年長者は唄う若者たちを褒めたり、檄を飛ばすなどして、芸能の教授をおこなっていた。

二番、旗は、「連帯」でもつべし

わたしは、研究調査のよき相談役だったTさんから「白保の芸能をよく見なさい」とアドバイスをされた。そのときはちょうど豊年祭が近づいていた。わたしは祭りの準備を手伝う傍ら、児童から青年までが参加するという「旗頭奉納」の練習を見学しようと、夕方は学校のグラウンドへ、夜は公民館へと、白保の芸能の魅力に引き込まれるように毎晩のように出かけていった。

旗頭奉納とは、御嶽の前でその年の豊年を神に感謝し、来夏世の豊作を願う奉納儀礼のことである。八重山諸島の旗頭には、「トゥール」と「スマヤ」とよばれる二本の旗頭がある。二〇一一年の旗頭奉納も、御嶽の前に集まった神事を司る神司や公民館役員、そして村の人びとが注目するなかで執りおこなわれた。わたしが白保の旗頭を見るのは、これが三度目である。初めは青年たちの勇ましさに圧倒され、二度目は練習過程から観察し、儀礼の順序を把握するのに必死だった。三度目は、人に混じって雑談を楽しみ、ぎこちなさはあるものの合いの手を入れられるようになった。

白保では、旗頭のもち手としての決まり、あるいは禁忌がある。

白保の伝統的な旗頭の挙げ方は、もち手が一人でもち上げて降ろすという方法である。旗頭は、それぞれ五〇キロ近い重さで、長さは七メートルから八メートルあり、力と技術がないともち上げることができない。もち手は、幅約四〇センチ、長さ五メートルの白い晒を腰に巻き、旗頭を腹と両腕で支えてもち上げる。その際、責任者の技量、そして旗頭を支えるティージナ(手綱)との呼吸が揃わなければ、大きな事故を引き起こしてしまう。旗頭をもち上げて降ろすあいだは、全神経を集中させ、みんなが一心同体でなければならぬ。旗頭保存会の青年たちは皆、「旗頭は絶対に倒してはならない」と言う。そして、旗頭は、どんなに体格が立派であっても、青年たちの連帯があつてこそ為せる技なのだ、力強く語った。

芸能は、芸能の実践者と鑑賞者の両者が揃って初めて成立する。そして、実践者と鑑賞者の呼応のあいだで価値が共有され、継承に繋がっている。とりわけ、鑑賞者の合いの手が芸能の実践者への激励となり、ときにはその芸能の熟達度を試す機会にもなる。つまり、こうした鑑賞者による合いの手は、芸能

の継承過程において非常に重要な役割を担っているのだ。また、鑑賞者は、定期的に祭りに足を運び、芸能を単に見るだけでは、その役割を充分に果たせるとは限らない。鑑賞者も実践者と同じように、多様な年齢層に属する人びとの交流を通して、知識としての芸能を身につけてこそ、「芸能を見る」ことができるようになるからだ。白保の旗頭を支える鑑賞者も、こうした関係のなかで育ち、ひいては、それが地域の伝統芸能を継承することに繋がっている。

わたしは、ワールドで出会った人びとから芸能を「見る」ことの大切さを教わり、わたし自身も鑑賞者という立場から地元の芸能を「見る」ことで、伝統芸能を支える一員になるのだということを改めて気づかされたのである。



「トゥール」と「スマヤ」とよばれるそれぞれ2本の旗頭



旗頭は「村のエリート」しかもてないと、白保の年長者は語る



「責任者」を中心に旗頭の青年らが杵を作成している

1月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■ 14時30分から15時30分

■ 展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、
話題や内容は実に多彩。
どんでん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

6日
(11月11日)

話者：庄司博史（国立民族学博物館 教授）
話題：移民のささえるヨーロッパ
会場：ヨーロッパ展示場

13日
(11月18日)

話者：新免光比呂（国立民族学博物館 准教授）
話題：ヨーロッパのキリスト教
会場：ヨーロッパ展示場

20日
(11月25日)

話者：松本雄一（国立民族学博物館 機関研究員）
話題：アンデスの神殿とその魅力
会場：東南アジア休憩所

27日
(12月2日)

話者：小川さやか（国立民族学博物館 助教）
話題：路上空間は誰のもの？
——路上商人による暴動を事例に
会場：東南アジア休憩所

1年間みんなくに何度でも入館できる 「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいあります。

- 特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
 - ◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
 - ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。
- 詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893/平日9:00~17:00)

編集後記

本号は1月号恒例の干支特集としてヘビをとりあげた。昨年の龍はおどおどろしい空想の動物、ヘビは現実の身近な生きものという違いはあるが、両者にまつわる信仰が、水や天候、大地を支配する神聖を認める点でかなり重なり合っていることを改めて感じた。

一方、今回の特集ではあまり触れられていないが、ヘビにはもう一つの側面がある。それは忌み嫌われ、あまり歓迎されない邪悪なイメージで、うじ虫を連想させる、地を這いまわる姿からきているようだ。日本語のヘビやハブの語源が「這う」にあるともいわれるが、英語のスネークやラテン系諸語のセルペントなども「這う」という語に発しており、うじ虫という語と同源の場合もすくなくない。野道で遭遇すると、気持ち悪さと恐ろしさからヘビだけは追いかけてまわしてひどい目に合わせていた残酷な少年時代をふり返り、ヘビには悪いことをしたと思うが、変な気分になったことは忘れない。

こんな相反するイメージをあわせもつヘビではあるが、今年はおどろきの側面をみせてくれるのであろうか。

(庄司博史)

- 表紙：舞踏用仮面「ナーガ(コブラ) 魔神」
標本番号：H0085979 地域：スリランカ

次号の予告

特集 はじめてに光ありき(仮)

月刊みんなく 2013年1月号

第37巻第1号通巻第424号 2013年1月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 八杉桂穂
編集委員 庄司博史(編集長) 小川さやか 樫永真佐夫
久保正敏 菅瀬晶子 山中由里子
編集アドバイザー 山内直樹
デザイン 宮谷一孝
制作・協力 財団法人千里文化財団
印刷 日本写真印刷株式会社

- *本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
- *本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。)
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてください。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

